



未亡人は女子校生

ちゅちゅんは遺影の前で

種付けを懇願します

- ・このデータは冒頭プロログまでを収録したサンプルとなります。
- ・お使いの環境によっては見開き表示にした際、ページが左右逆になる場合がございます。
- ・令和4年より成人年齢の引き上げに伴い16歳での結婚は不可となりました。
この作品は架空の世界、架空の国での出来事となります。
- ・作中の挿絵は全てAIによる出力物に微細な加工を施したものとなります。



Age:17 Fカップ

はるひ

ちゆう

春日 千優

お隣同士の幼馴染と
16歳で結婚した美少女。
しかし入籍3ヶ月で死別し
現在は義父の英良と共に
お互いを支え合うように
生活している。

Age:17 Eカップ

ささはら かりん

佐々原 花凛

千優を敵視する同級生。
家庭内が少々荒んでおり、
セックスでストレス発散をする
癖がついてしまっている。

春日家とはなにやら
昔からの因縁があるようで…？





Age:17 Cカップ

ときさか すみれ

時坂 純礼

千優のクラスメイト。

華道部の部長を務めており、
幼い頃からの厳しいしつけの
おかげで真面目でお堅い性格に
育っている。

むっつり。

未亡人は女子校生

くちゅちゃんは遺影の前で種付けを懇願しますく

サンプル

〈未亡人〉 みぼうじん 意・夫に死なれてしまった妻のこと

【プロローグ】 過去

冬だというのに、室内には湿った熱気が充満していました。

若い男女が汗だくでまぐわう、愛液の酸化も相まった淫靡いんぴなすえた臭い。閉じたカーテンのわずかな隙間からこぼれる光に埃が踊る中、少年は後背位の体勢で少女へと遠慮なく腰を叩きつけます。

「んああっ！ はあ、いいっ—— もっと、もっとして、椎那しいなっ」

「今日ががつついてんなあ花凛かりん。ストレス溜たままってんの」

「うるさ……、真面目、に、あっ、やってよ、もおっ」

「セックスなの？ ゆるしく、楽しもう、ぜっ、と」

「あうっ、そこ、ん、ぐりぐり……っ、好き……！」

「俺もこのデカ尻は好き。ふう、ちよつと休憩していい？」

「尻は、って何……んうっ、ちよ、止めないで……ね、して？」

花凛と呼ばれた16歳の少女は、トロけた甘声で艶のある丸いヒップを振りアピールおねだりしようとしてきました。ですが膣内を巨根が隙間なく埋めているので、とろとろの蜜壁を押し付けてわずかに左右へ振れるだけになります。

相手である同い歳の椎那は、花凜の普段は強気で勝気なくせにセックスの時は大人しくなるところ、歳のわりに発育の良い揉みごたえのある胸、掴みがいのある尻が気に入っていました。

「ねえお願い、もうちよつとお」

「疲れてんの。『おちんぽください』って言ったら考えなくもない」

「アンタほんと……。はあ、ちんこくださいーい」

「萎えるわあ」

付き合っている訳ではないこの二人。

ただ都合が良いから、体の相性も悪くないから、お互い恋愛感情が生まれないとわかっているから、あと家も近いし——そんな理由です。

やれやれ、とばかりに椎那はピストンを再開しました。

——ぱんっ、ぱんっ、ぷちゅっ、ぱちゅっ

「はう、いいの、おく、おく来てっ」

腹筋を使い腰だけを打ち付ける器用な抽挿に、重たく垂れた胸がぶる、ぶる、と前後します。



椎那は空いた手でペットボトルの水を飲み下すと、ようやく花凜の腰骨を掴み本格的なまぐわいへと移行しました。

「っあーきもち……」

「ふあっ、もっと、強く突いてっ」

「指図すんな、よっ、おらっ」

「あ、ああーっ、あ~~~~っ♡」

花凜の好きな場所は最奥よりも少し手前の、やや右側上部。素早くノックして、上側を太いカリ首で引っ搔いてやり、わずかに休んだ後、奥を突く。ねっちりと、少しだけ焦らしながら繰り返せば……

「はっ、んおっ♡ すご、うあ、い、お、クるっっ」

このように、犬のごとく舌を出して喘ぐ姿の完成です。

「声やば。何言ってるの」

「らっ、て、しいな、うますぎ、いんっ、はああっ」

「お前めが淫乱なだけだろ」

「ちが、うし…んあうっ」

「違うんならもう終わるか？ 疲れたし」

「えっやだあ！ ……淫乱で、いいから、抜かないで……」

学年のカーस्टトップから向けられる懇願のうるんだ瞳。お尻を突き上げ結合部を見せつけ、くちゅくちゅと音を立ててねだる様。快楽に屈服し発情するあさましい姿を見下ろす——
椎那が最も愉悦する瞬間です。

「中でい？」

「……うん。生で、いいよ」

「よっしや」

乱暴に、身勝手に、膣奥を削るような突きへ。たわむ尻肉が波打つのに合わせベッドが軋む音も激しくなっています。

——ばんばんっ どちらゅっ、ぶちゅちゅっ、ぐちゅうつつ！

「あつ、本気突きヤバあつ、こえ、これすきいっ♡」

先のじやれるような繋がり合いではない、吐精特化の本気ピストン。奥に溜まった愛液をかき出すカリの引っかかりがもたらす甘美な痺れに、たまらず花凛の腰は仰け反ります。

「っ、きもち、い、あ、あああつ、す、すごい♡ いいのっ♡」

無意識によじれる脇腹を掴まれ、さらに体重をかけたプレスピストンに胸はベッドへ押し潰されました。痛いほど尖る乳首がシーツと甘く擦れ合い、花凛は顔をぐちゃぐちゃにしながら叫びます。

「ふあああつ！ だめだめっ、も、だめ、イっちゃ、つく、ん、あ、んんんうっつ！」

暴力的な快楽に脳内はぱちぱちと弾け、ふやけた理性は溶け去り、花凛の子宮は子種を欲して肉棒にちゅむうっ♡ と吸い付きました。

「射精る……っ」

「私も、イク、イク、イ、っ~~~~~♡」

——どくんっ、どく…どくっ…ごぷぷっ

無責任に精液を放出し終わると、両者共にベッドへ倒れ込みました。椎那は飲料水を飲み欲すと、花凜の運動部らしい引き締まった背中に向かって言います。

「っはー。うめ。飲む？」

「……回し飲みとか無理」

「いや、新しいの出すって意味」

「いらない」

ピロートークはこの二人に存在しません。むしろ花凜の方がセックス後は淡泊でした。そのヒップをなんとなくねりながら訊きます。

「今度尻使^{ケツ}っていい？」

「は？ ありえねー」

「いつ使わしてくれんの」

「今生ねーわ。他のセフレとやれば」

「今いないんだよなー、募集中。あ、じゃあ野外は？」

本気ではなく、どうせ「死ね」くらいの口悪い返答が来ると予想していました。ですが――

「えっ……………ウソ……………」

「何。いいの？」

様子のおかしい花凛。見ると、手にはスマホ。画面にはトークアプリらしき表示。ぽこん、ぽこんという通知音は椎那のスマホでも。

「どしたん」

「……………と、せんぱい、…が」

「何？　なんて？」

二人のステータスバーには同じ人物名が表示されていました。

「――は？　死んだ？」



サンプルはここまでとなります。お気に召しましたら続きは製品版にてお楽しみください。